学校の教育目標：やさしく かしこく たくましく　経営方針：心の宝物に満ちた学校に

かさはら THE TEAM

令和 4 年度
笠原小学校
学校便り
7 月 8 日号

児童会：誰もが楽しい笠原小学校を創りあげていくために、思いやり・ルールを大切にしよう

夏の思い出と心の宝物

校長　鈴木　稔朗

来週7月13日は、仏教でいう盆の入り。子どもの頃の私には、この日が夏の始まりでした。

生家の、仏壇の前には盆棚が準備されました。祖父が、胡瓜の馬、茄子の牛を作るのを手伝いながら、今夜、ご先祖がこの馬に乗ってあの世から駆けて帰ってくること、お盆が終わるとこの牛に乗ってゆっくり帰ること、その日に持って帰ってもらうように、たくさんのお供物をするのだと教わりました。玄関先で迎え火を焚いて空を見上げると、たくさんの馬が駆け下りてくるのが見えるような気がしました。

盆の入りには、ながせ商店街を中心に、盆明けには新町銀座商店街を中心に、「祇園祭り」（提灯祭り）が催されました。生家近くの広小路通り商店街は、夕方から自動車を遮断して歩行者天国となり、家々の玄関先には、山から切り出した孟宗竹に提灯が灯されました。我が家は破れ提灯でしたが、通り沿いの商家は見栄を競い、絵入の美しい提灯を毎年のように新調されました。宵闇にそれが灯る様は見事で心が浮き立ちます。たくさんの出店と盆踊りの輪。この日のこの区間だけは、免許のない下級生も自転車に乗ることができました。夜店をのぞきながら遊び回り、夜9時の音楽を聴いてようやく家路につきました。

お盆の間は仏壇の前が賑やかになりました。花が飾られ、親戚から送られたお供物が山のように積まれます。近在の親戚がお参りに来ては、よもやま話をしていくのを横で聞きながら、お茶菓子のお相伴に預かるのも楽しみでした。

盆明けの夜は、ご先祖があの世に帰っていきます。送り火を燃やした後、近所の生花店で買った木造りの船に、胡瓜の馬、茄子の牛、提灯、いくつかのお供えを携えて、家族と土岐川の河原へ向かいます。お供えを満載し、提灯に火を入れた船を川の中程まで引いていくのは、草履に半ズボンの私の役目でした。流れに乗せた後は、一目散に昭和橋に駆け上がり、欄干にもたれながら見送りました。宵闇の川一面に、提灯を点してたゆたう何百艘という精霊流しの船は幻想的で美しく、いつまで眺めていても飽きることはありませんでした。

翌日はうって変わって悲惨な光景が河原に広がります。あちこちに座礁した木舟、炎天下で傷んでいくお供え物をついばむカラス。腕白坊主どもがそれを放っておくはずがありません。引っかかった木舟を集めては本流に戻し、遠くから石を投げて、流れる船を誰が一番多く撃沈できるかを競いました。「こらぁ！何やっとる！たわけぇ！」「ほんなことすると罰があたるぞ！」時折、土手を通りかかったお年寄りに怒鳴られます。しばらくは橋の下で身を潜めますが、やりすごすとまた再開。「明日もやろか！」悪巧みをして家へ帰ると、不思議と夕立で大水が出て、翌朝にはあれほどあった船が一掃されています。がっかりしながら、しかしすぐ次の悪さをさがします。あっという間に夏休みが来ました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

実家は兄が継ぎ、私は別に一家を構えました。環境保護の観点から、精霊流しも七夕流しも禁止され、お盆は私にとって、実家の仏壇と墓参にお参りする年中行事の一つになっていました。しかし、9年前に同居の母を亡くしてからは、再びお盆が我がこととなりました。

母は戦前生まれでした。教師をしていた祖父は、妻と十人の子どもを抱え、三河の山奥から名古屋へ出ました。決して裕福ではなかったものの、苦労して子どもたちを学校へ出しま

す。おかげで母も女学校を卒業し、教師となりました。やがて縁あって父のもとに嫁ぎ、私をなしました。父には先妻との間に生まれた四人の子どもがおりました。
　物心がつく前の記憶はあまりありません。しかし、母によく抱きしめられたこと、そうして、耳元で何か温かい言葉をささやいてくれたこと、膝でよく本を読んでくれたことはしっかりと記憶に残っています。
　「そうしとると、いろんなことがすうっと溶けていくような気がしたよ」亡くなる少し前、ぽつりとこう語ってくれたことを思い出します。
　若い母にとって、後妻として嫁いだ婚家での生活はいいときばかりではなかったでしょう。それがあふれる愛情の表現のみでなく、母にとってはある種の支えや逃避になっていたのだとしても、懐深く抱きしめられ、自分は誰かにとってかけがえのない存在なのだという思いを、体と心に刻み込んでくれたことだけは確かです。それが、これまで多くのつまずきや挫折を経験するたびに、私に立ち上がり、再び歩き出す力を与えてくれました。
　「いつかきっと、このかけがえのない贈り物をくれたことに、母にきちんとお礼を言おう」
　そういう思いはずっと心にありました。しかし、80を超えて尚多くの友人と外出し、亡くなる前日まで車に乗って出かけていた母の元気に甘えて、ついつい後回しにしてしまいました。それどころか、むしろ憎まれ口ばかりきいていました。温泉に連れて行ってあげたり、時折は肩を揉んで上げたり、優しい言葉をかけてあげたり。親孝行らしい親孝行が何一つできないまま、9年前の５月、突然別れることになってしまいました。
　「僕を産んでくれてありがとう。僕の母さんであってくれてありがとう。あなたの子であることを誇りに思っています。ずっとずっと大好きです。本当にありがとう。母さん。」
　母が亡くなってから、朝夕に読経した後、必ず心の中で感謝を伝えています。9年間で6500回あまり。しかし、育んでくれた年月には遠く及びませんし、何よりもう遅い。取り返しはつきません。
　幼い頃に母がしてくれたことのおかげで、私は「自分は生きていていいのだ」という小さくても確かな自信をもつことができたのだと思います。これは母が私に与えてくれた「心の宝物」です。だからそれを、自分がこれから出会う全ての子どもたちに返そう。母が亡くなった日にそう決意しました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
　どれだけでもあったはずの「ちゃんと気持ちを言葉で伝える機会」を逃してしまったかつての腕白坊主。愚かで横着だったことの後悔が、彼の胸から消えることはありません。しかし悔やみ続けることを母が決して喜ばないことも、彼は知っています。
　後悔を、深い感謝で塗り替え、その思いを、自分自身の軸として、今までもこれからも、精一杯、子どもたちに、笠原小学校に関ってくださる全ての方に正対し、全力を尽くそう。この決意が、一人一人の心に確かな「心の宝物」が見つかり、かがやき、満ちることを願う私の原動力であり、原点です。
　お盆は、私にとって、教師としての、校長としての、教育への決意を新たにする日です。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
　間もなく夏休みを迎え、子どもたちは、地域やご家庭で長い時間を過ごすことになります。どうか笠原小学校の全児童が、健やかにそれぞれの「子どもの頃の夏」を経験してほしいと願います。普段より長いご家族との触れ合いの中で、自分を育んでくれた保護者の皆様に、「産んでくれてありがとう」「私の親であってくれてありがとう」とお伝えする機会があってほしいと願います。保護者の皆様からも改めて「あなたがきてくれて本当によかった」「生まれてきてくれてありがとう」と、言葉で、笑顔で伝えていただく機会があってほしいと願います。そうして、361 名全員が、それぞれの命と笑顔を穏やかに輝かせ、安心して学校へ帰ってきてほしい、そんな夏休みを過ごしてほしいと、今、心から願っています。